

〈研究ノート〉

# 桜ヴォーチェと SANBIKA ワークショップ — 賛美歌をとおした新島学園短期大学と地域・国際交流の試み —

澤田 まゆみ 山下 智子 鷹野 恵

*SAKURA VOCE* and *SANBIKA* Workshop :  
Niijima Gakuen Junior College's Endeavors to Build Community  
Ties and Foster International Relations via the Use of Hymns

Mayumi SAWADA, Tomoko YAMASHITA, Megumi TAKANO

*Niijima Gakuen Junior College*  
*Takasaki, Gunma 370-0068, Japan*

## 要 旨

新島学園短期大学における賛美歌をとおした諸活動を概観し、その中でも2013年度から学内外、地域との連携によって始まった「桜ヴォーチェ」の活動を振り返る。大学と地域・国際交流の試みとして行ってきた約5年間のとりくみについて、その目的や課題を整理し、今後の活動体制や方法について方向性を探った。

## 1 はじめに

キリスト教主義教育を行う大学において、聖書と並び賛美歌も重要な位置を占めているといえよう。学生・教職員らは礼拝や講話、授業等において聖書の内容に触れ、理解を深めるとともに、聖書の内容を歌った賛美歌に拠ってもその活動が高められていると考える。

筆者らは宗教主任（山下）、奏楽・聖歌隊指導者（澤田）、音楽関連授業での声楽指導者（鷹野）としてこれまで6～12年にわたり新島学園短期大学（以下、本学）に勤務し、キリスト教主義教育に携わってきた。本学において賛美歌は入学式や卒業式の他、毎週火曜に行われているチャペルアワー<sup>1</sup>、クリスマス関連行事（クリスマスツリー点灯式、キャンドルライトサービス・お祝いの会）などでも複数曲ずつが賛美され、賛美歌が導入されている授業もキリスト教関連のものを中心に複数ある。また、学外においても聖歌隊が地域の病院や福祉施設、大学など様々な場所・機会に賛美歌を歌い、コミュニティ子ども学科の学生はキリスト教主義教育を行う幼稚園や保育園等にて「こどもさんびか」にも触れている。

このように、本学では多くの賛美歌に触れる機会がありながら、または多いからこそ、それぞれの賛美歌についてその礎となっている聖書の意味や、音楽的な背景などについては、理解や関心を深められないままになってしまっていることも多い。たとえば聖歌隊は1週間に1曲の賛美歌を仕上げ、年間に30曲以上を歌唱する。また、チャペルアワーの参加者全員が歌唱する賛美歌（基本的に2曲）は、とくに新しいものについては礼拝前に一度1番のみを全員で歌う「賛美歌練習」を行うものの、旋律と歌詞を確認するので精一杯という実情がある。講話や授業で特定の賛美歌について詳細に扱う機会はあるが、その数は賛美歌の全体の歌唱機会に比べれば圧倒的に少ない。

筆者らは2013年夏に「桜ヴォーチェ」の活動を始動し、2015年からはSANBIKAワークショップにおいて賛美歌を用いた活動を行ってきた。その中で、賛美歌の内容の理解を深め関心を高めつつ共に歌うことは、本学学生や教職員のみにも求められていることではなく、大学と地域・国際交流の試みにも発展し得ることを見出している。本稿ではこれら5年間の活動をふり返り、その目的や課題を整理して今後の活動体制や方法について方向性を探るものである。

## 2 桜ヴォーチェの誕生～地域・他大学との連携

### 2-1 桜ヴォーチェの誕生

発端は2013年2月に、日本と海外のアマチュア音楽家の音楽交流を企画している

任意団体から、本学の聖歌隊にバチカンのミサでの献唱と親善コンサートの誘いがあったことである<sup>2</sup>。それまでもいくつかの誘いがあったが、どれも学生には高額で実現には至っていなかった。しかし今回は参加人数によっては可能性のある内容であったため、顧問の澤田が当時の聖歌隊学生および聖歌隊卒業生らにまず意向を尋ねた。実施が約1年後ということもあってか何人かが参加の意思を示した。しかし催行決定の10人に届くことは難しく、費用面でも人数が多いことが好ましいため、宗主任の山下にも相談をしたところ、本学の聖歌隊だけでなく中高の聖歌隊や関係大学の聖歌隊、教会にも声かけをしてはどうかと提案があった。そこで、中高の聖歌隊やそれまで何度か交流もあった県内のキリスト教主義教育を行っている共愛学園前橋国際大学聖歌隊、2つの関係教会、澤田が以前所属し主にルネサンス時代のアカペラ作品に多く取り組んでいる市内の群馬室内合唱団や本学の教職員にも呼びかけたところ、計26名が参加を申し込むこととなった<sup>3</sup>。

本学では海外へのスタディツアーも行っているため、その枠組みでの実施も検討したが、1年後の履修や人数の確定は難しく、催行のための申込期限も迫っていたことから断念し、学生も教職員もあくまで個人として参加することとなった。

## 2-2 地域・他大学との連携

2-1の状況から、個人としての参加ではあるものの、本学聖歌隊を母体とした活動であることもあり、顧問の澤田が連絡・とりまとめ係となって、練習計画や準備をすすめた。初回の顔合わせ・練習を2013年8月に本学で行うこととし、それ以降は群馬室内合唱団の活動場所である市内公民館とほぼ交互に、2014年の3月の本番までの間、1回3～4時間の練習を月2回（計16回）、参加者の多く参加できる土日を選んで設定した。

ミサでの曲目やコンサートプログラム、イタリアの合唱団との合同曲等の選曲については、参加者が所属する本学聖歌隊や群馬室内合唱団、共愛学園前橋国際大学聖歌隊、日本キリスト教団高崎教会の活動で歌われているものを優先し、調整した。そのことにより、練習において各団体、参加者の経験が生かされ、また、お互いの活動を知りながら新たな賛美歌を共有することとなり、自然と賛美歌の理解や参加者の交流の輪が広がっていった。練習の方法や進め方が当初から懸案ではあったが、基本的には「指導者」をおくのではなく、前述のように各参加者の活動の経験を共有する場として、参加者全員で意見を出し合い、仕上げていくことを尊重した。9月にほぼすべての曲目が確定し、各パートの練習も進んできたところで10月には曲順や指揮者等を決定し、それ以降は指揮者がリーダー的役割をもって音楽づくりを進めていった。団体名も参加者から公募し、投票の結果「桜ヴォーチェ（SAKUR

A VOCE)」と決まった<sup>4</sup>。

表1 イタリアでのミサ、親善コンサート（2回）の曲目

曲種	曲名	ヴァル バニア	サン レオ	ミサ	指揮
N	Dona nobis pacem (作曲者不詳)	○	○		澤田
G	Missa Brevis (Palestrina) ~ Kyrie, Sanctus, Agnus Dei	○	○	○	竹歳☆
G	Ave Maria (Arcadelt)	○	○	○	鷹野
G	Ave Maria (Victoria)	○	○		鷹野
G	Ave Maria (Aquilanti)	○	○		鷹野
NT	Let There Be Peace on Earth (Jill Jackson and Sy Miller) [地には平和 日本語訳：塚本潤一]	○	○	○	澤田
NMT	In the bulb there is a flower (Natalie Sleeth) [球根の中には] *	○	○		鷹野
G	日本の歌メドレー [花／荒城の月／浜辺の歌] (源田俊一郎編) *	○	△		鷹野
S	Signore Dolce Volto (J.S.Bach)		◎	○	澤田
O	さくら (日本古謡)		○		鷹野
O	ふるさと (岡野貞一作／河西保郎編)		○		鷹野
N	見よ、兄弟が (塩田泉) 【合同】	○	○		澤田
L	女声合唱2曲 【合同】	○			Fenice★
S	Ave verum corpus (Mozart) 【合同】 *		○	○	鷹野

N/新島学園短期大学関連 G/群馬室内合唱団関連 T/日本キリスト教団高崎教会関連 M/共愛学園前橋国際大学関連 L/ラ・ピアーナ合唱団からの提案 S/サンレオの合唱団からの提案 O/桜ヴォーチェ独自の選曲 ☆/群馬室内合唱団団長 ★/ラ・ピアーナ合唱団指揮者 \*澤田による伴奏つき (他はすべて無伴奏) ◎合同でも演奏 △懇親会での歌唱のみ

12月には、懇親会を開催して練習以外での交流を深め、12月17日の本学でのクリスマスキャンドルライトサービスにおいて2曲（アルカデルト：アヴェ・マリア、塩田泉：見よ、兄弟が）を賛美する機会も得た。これが桜ヴォーチェの最初の演奏機会となる。

このように準備と活動は順風満帆に進む中で、大変残念なことがあった。参加を予定していた本学聖歌隊学生4名と共愛学園前橋国際大学聖歌隊学生2名が、2013年夏～冬にかけて金銭面や家庭等の様々な事情で参加を断念せざるを得なくなってしまったことである。これら若い学生たちの参加がもともとの母体であり、目的であったはずなのであるが、桜ヴォーチェは1年弱の間に本学聖歌隊をとりまく地域や関係者がその主なメンバーになることとなった。最終的には22名（本学聖歌隊1、

卒業生 1、教員 4、元職員 1、教員家族 3、元職員家族 1、共愛学園前橋国際大学聖歌隊 1、群馬室内合唱団 7、元団員 1、団員家族 1、日本キリスト教団高崎教会員 1) でイタリアへ渡航することとなる。

### 3 イタリアでの賛美と帰国後の活動

#### 3-1 イタリアでの賛美

2014年3月20日から28日の計9日間の行程の中で、ヴァルバニアのコッレジャータ・ディ・レオナルド教会にて現地の合唱団ラ・ピアーナとの親善コンサート(21日)、サンレオのドゥオモ・ディ・サンレオ教区教会にてミサ献歌およびスコラ・カントルム・デル・ドゥオモ・ディ・サンレオとの親善コンサート(23日)が行われた。ラ・ピアーナとスコラ・カントルム・デル・ドゥオモ・ディ・サンレオとの懇親会も行われ、24日以降はサンマリノ共和国、アッシジ、ペルージャ、ローマ、バチカン市国をまわり、イタリアの合唱文化やキリスト教の歴史・建築・文化にも大いに見識を深める機会となった。



(左) 資料1 ヴァルバニアのコッレジャータ・ディ・レオナルド教会前にて

(右) 資料2 サンレオのドゥオモ・ディ・サンレオ教区教会でのコンサートにて

宗教主任山下やイタリア語の堪能な参加者がメンバーにいたことで、これらの見聞は参加者にとってあらゆる角度からの疑問や興味にも応え得るものとなった。それまで主に「歌うこと」を楽しんでいた参加者らも、「賛美歌」の意味や役割、キリスト教における意味や解釈などについて関心をもち出した。サンレオでの実際の

ミサで献歌したことや、日本語の賛美歌「見よ、兄弟が」（『讚美歌21』162番）をイタリア語に訳してイタリア人らと歌ったことなどがその契機になったといえる。

### 3-2 帰国後の活動

イタリア公演を目標に約7カ月活動した桜ヴォーチェであったが、帰国後も演奏や交流を続けたいという声があり、2014年5月11日に群馬室内合唱団の活動場所に隣接し、群馬室内合唱団や本学の聖歌隊とも交流ある恵みキリスト教会（高崎市市中居町）にて記念コンサートを開催した。また同時に、それまでの活動をまとめたニュースレターも山下により創刊した<sup>5</sup>。出演者はこのときイタリアで演奏した18人のメンバーのうち、20～70代の計15人であった（資料3）。その後、本学聖歌隊、群馬室内合唱団、日本キリスト教団高崎教会、共愛学園前橋国際大学聖歌隊およびその関係者あてに、「宗教曲の背景にあるキリスト教や文化について理解を深めたい人、国内外の教会や礼拝で宗教曲、賛美歌を歌いたい人」を募って活動の継続を試みた。

まず、鷹野の主催する沼田市・旧日本基督教団沼田教会記念会堂での「Takano Megumi Birthday Concert 2014」（2014年8月17日）と、本学での「寒梅コンサート」（2015年1月24日）を設定した。8月のコンサートは当日の練習しかできなかったものの本学聖歌隊とその卒業生、日本キリスト教団高崎教会から各1人計3名が新メンバーとして加わって行われた。1月に向けてはさらに若い10～20代の3人（本学聖歌隊卒業生と群馬室内合唱団員の家族）も加わり、11月から月2回（計6回）の練習を設け、各団体が普段歌っている1～2曲の推薦曲を共に歌っていきながら、交流・学びを深めた。「寒梅コンサート」は桜ヴォーチェの演奏のみでなく、共愛学園前橋国際大学聖歌隊、群馬室内合唱団、本学聖歌隊もそれぞれ演奏を行い、合同での賛美も行う交流コンサートとし、合同演奏2曲（Mozart：Ave verum corpus、スリース：球根の中には）では指揮や奏楽を各団体の代表者らに分担して、全体の司会や運営を本学聖歌隊と山下・澤田が担った（資料4）。コンサート終了後には30分程度の茶話会を設け、山下によるニュースレターも第2号を発行した。

これら一連の帰国後の取り組みは、とくに若い新たな参加者を迎えられたこと、そして海外での賛美という形にとらわれず、純粹に賛美歌をとおしての活動と交流に焦点があてられたことが大きな成果であったといえる。一方で、海外での演奏を前提に活動をしたいという声もあり、また、とくに運営資金がない中で楽譜や必要備品等をなるべく個人で準備しつつ、施設利用については群馬室内合唱団の縁故や大学の協力に拠る部分も大きかった。その後の活動や運営をどうするべきか、幾度となく桜ヴォーチェのメンバーで意見交換をし、思案する時期でもあった。





(左) 資料 3 帰国後の記念コンサートにて (2014年 5月11日)

(右) 資料 4 「寒梅コンサート」での合同演奏 (2015年 1月24日)

#### 4 SANBIKA ワークショップ2015～2017

3をふまえ、筆者らはそれまでの連携関係や交流を生かしつつ、「賛美歌」を本学の学生・教職員らと地域の方々が共に歌う活動を、本学の教育活動と合わせて存続させていく方法はないかと考えた。なぜなら桜ヴォーチェの活動の中で、賛美歌や宗教曲を通じて、もっとキリスト教にふれたい、キリスト教について知りたいという声があったからである。これは本学聖歌隊も含め、桜ヴォーチェに参加した人の多くが、歌うことは好きであるが、賛美歌やキリスト教のことはあまりよく知らない、という状況からくと推察される<sup>6</sup>。そうであるとすれば、キリスト教主義教育をうたう本学において、賛美歌を共に歌い、キリスト教について共に学ぶ機会をひろく提供することは、本学の使命の一つを果たすことにもなると考えた。

地域開放型の公開講座のような形をイメージして本学の担当部署に相談をし、2015年度の事業として申請した<sup>7</sup>。タイトルは「SANBIKA ワークショップ」として数多くある賛美歌、こどもさんびかやゴスペル、各国の賛美歌や宗教曲をも含める可能性をもたせ、講座ではなく共に歌い学ぶという桜ヴォーチェの方針を受け継いでワークショップとした。

##### 4-1 概要

毎年テーマを設け2曲の賛美歌を選び、年2回のワークショップとその成果を発表できる場として本学関連行事等で賛美する機会も年2回ずつ設定した。ワークショップ各回は講話30分と合唱2時間とし、内容を少し変えつつ2曲の賛美歌を必ず毎回扱うようにした。よって参加者は年2回のワークショップのうち1回の参加でも可能となり、行事等での賛美については任意参加とした。

2015年度から2017年度に実施したワークショップのテーマと賛美歌は表2の通りである。賛美歌は桜ヴェォーチェの継続と発展の意味から2015年度は2曲、2016年度は1曲（地には平和）をイタリアで桜ヴェォーチェが賛美したものから選曲した。

表2 SANBIKA ワークショップ2015～2017のテーマと曲目

年 月	テ ー マ	曲 目
2015 12/1月	沈黙から賛美へ —いのちの希望をうたう—	球根の中には（『讃美歌21』575番） 見よ、兄弟が（『讃美歌21』162番）
2016 11/12月	天には栄光 地には平和 —クリスマスの喜びをうたう—	あら野のはてに（『讃美歌21』263番） 地には平和
2017 10/11月	あがめよわが魂 たたえよわが心 —マリアの喜びをうたう—	まきびとひつじを（『讃美歌』103番） あがめます主を（『讃美歌21』178番）

対象は本学学生・教職員・卒業生を含む一般とし、講話の内容から2015～2016年度は高校生以上としていた。しかし、2016年度に小学6年生からの参加希望を受け入れたことから、2017年度からは中学生以上としている。定員は貸出可能な聖書、賛美歌の数などから30人、参加費は無料とした。

講師は山下、澤田、鷹野が務め、それぞれの役割を分担した。山下は賛美歌の背景にある主にキリスト教の意味について聖書と照らし合わせつつ、詞や曲の背景についても触れる講話（毎回30分）、澤田は賛美歌に参加者が慣れ親しみ、基本的な音や歌詞について確認する合唱（毎回60分）、鷹野は声楽専門家としての見地から参加者の発声や発音を高めつつ、賛美歌の演奏表現を楽しむ合唱（毎回60分）を担当することとした。

#### 4-2 ワークショップ

山下による講話は毎回パワーポイントを用いて行い、スクリーン上で見ていただくスライドを印刷し資料として配布するなど限られた時間でもなるべく参加者が理解できるよう努力をした。内容としては、賛美歌の作詞・作曲者、歴史などの背景を紹介したほか、その賛美歌のテーマについて、歌詞のもととなっている聖書箇所などを紹介しながらキリスト教の信仰や考え方について説明をした。

澤田による合唱は、まず主旋律を全員で歌ったり、歌詞を確認した後、希望する各パート（混声四部）に分かれてそれぞれの音の確認をオルガンまたはピアノを活用しながら行う。各回1時間の中で参加者が2曲の賛美歌に親しみ、各自のパートに大きな不安がないように導くよう努めている。男声参加者が少なく、音取りが難しいことも多いため、場合により女声・男声にわかれて自主練習の時間を設けつつ



(鷹野や本学聖歌隊学生などが可能な場合は一方のリーダーを任せて) 双方に指導をし、鷹野による仕上げの合唱に繋げている。

鷹野による合唱は、山下・澤田も合唱に加わり、必要な際は澤田がピアノまたはオルガンで音取りや伴奏を補助する。澤田による合唱は座位のまま行う事も多いが、鷹野による合唱は、立ち方、並び、目線などの指導も含まれ、鷹野が指揮者、参加者が合唱者となって立位で行われる。2回の限られた時間の中でも身体を使って歌うこと、四声の響を感じ取ること、人の前で演奏することを体感し、参加者が楽しんで歌えるように心がけた。それぞれの曲を先ず朗読し、日本語の単語のアクセント、助詞などを確認してはっきり発音する。慣れてきたら楽譜を離れ目線を遠くに読む。そして歌うときは、簡単な腹式呼吸の説明を入れながら日本語の語感を感じ取りながら歌えるようにした。歌詞の中には嬉しい、喜び、悲しい、驚きなど人間の感情を揺さぶる言葉があるので、これらの言葉を発する前の呼吸を意識させることにより歌う時にその曲に情感の伴った温かい合唱の響きを得ることができた。また、他のパートの動きがあってこそ自分のパートが生かされ、四声が重なるからこそより美しい響きが生まれること、よく聴くということにも意識を向けた。2回のうち1回のみ参加者にも達成感が得られるよう、時間の終わりには仕上げで歌うように心がけた。その歌う表情や声から参加者が楽しみ、短時間で徐々に詩の内容に合った情感をもって互いのパートを聴き合う様子が伺え、各回共に達成感のある合唱の時間となった。



(左) 資料5 SANBIKA ワークショップ2017第1回講話 (2017年10月14日)

(右) 資料6 SANBIKA ワークショップ2017第2回合唱 (2017年11月18日)

#### 4-3 行事での賛美

ワークショップ参加者有志による毎年2回ずつの行事での賛美では、筆者らも指揮(鷹野、澤田)や奏楽(澤田)、合唱(山下、澤田)にて参加している<sup>8)</sup>。2015～2017年度に実施した行事参加はいずれも本学での開催行事である(表3)。

各行事において、その年のワークショップで歌った2曲を賛美しているが、賛美歌の内容と行事には密接なかわりがある。2015年度は新島襄召天日に近い日程で行われた2014年度の「寒梅コンサート」の継続や、2016年3月が2011年の東日本大震災から5年となることを見込んだテーマ（沈黙から賛美へ）と曲目であり、2016～2017年度は、クリスマスに関連したテーマと曲目となっていることからクリスマス行事での賛美となった。つまり、ワークショップのテーマ、賛美歌はその年のどのような行事で賛美機会を得るかということとも関連してくることとなる。

表3 SANBIKA ワークショップ2015～2017参加者有志による行事での賛美

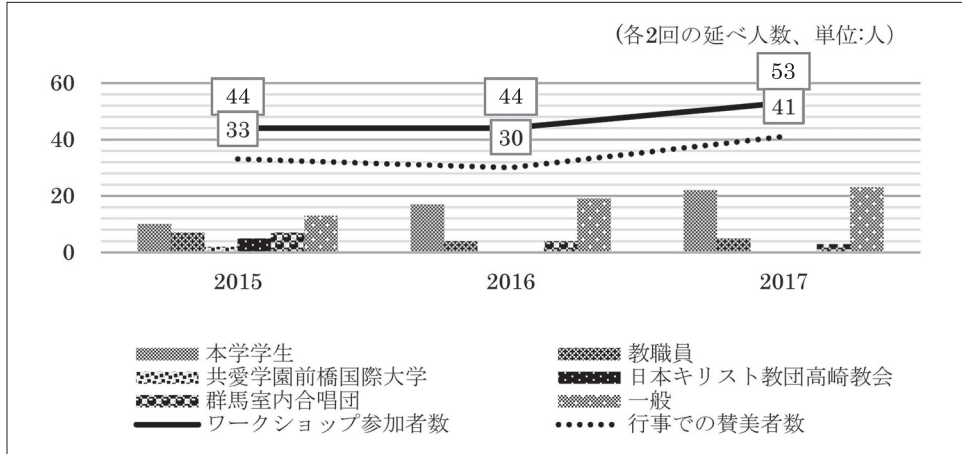
年度	行 事 名	日 時
2015	新島襄召天記念早天祈祷会（寒梅ミニコンサート） 東日本大震災5周年祈祷会	2016/1/23(土) 7:00～9:00 2016/3/11(金) 14:30～15:30
2016	高崎市民クリスマス クリスマスお祝いの会	2016/12/3(土) 14:00～17:00 2016/12/20(火) 17:00～18:00
2017	高崎市民クリスマス クリスマスお祝いの会	2017/12/2(土) 14:00～17:00 2017/12/19(火) 17:45～18:15

行事での賛美はワークショップの成果発表を目的としている。しかし、ワークショップ当日に行った行事（2016年度第1回）もあれば、ワークショップ実施から2～3ヶ月後に発表を行う参加者もいるのが現状である。行事での賛美直前にごく短い5～30分以内の声出しやワークショップで行ったことの確認の時間をとっているものの、ワークショップの成果を充分には発表し難い状況でもある。参加者の編成・人数もワークショップ時とは異なるため、声部編成や伴奏有無などについて、臨機応変に対応を行っている<sup>9</sup>。

#### 4-4 参加者の推移

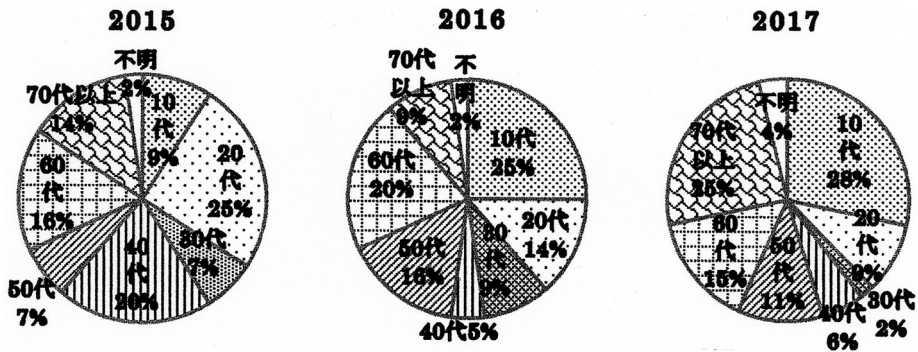
2015～2017年度のワークショップ参加者は延べ141人であり、行事での賛美者を含めると延べ245名である（資料7）。参加者総数は増加傾向にあり、とくに本学学生<sup>10</sup>と一般の参加者が増えている。これは本学聖歌隊員に積極的な声かけを行っていることと、毎年数名ずつではあるが一般の新規参加者がいることが要因として考えられる。広報は学内や学園関係者の他、桜ヴォーチェ結成時の関連団体や学校（共愛学園前橋国際大学、日本キリスト教団高崎教会、群馬室内合唱団）、県内の約30のキリスト教会・教団、10数の図書館や町内会（2地区）のほか、文化祭や本学での行事の際にチラシを配布したり、本学ホームページや同窓会報に掲載をしている。共愛学園前橋国際大学や日本キリスト教団高崎教会、群馬室内合唱団の参加者

が減少しているが、他の教会や合唱団からの参加がある。



資料7 SANBIKA ワークショップ2015～2017参加者数

参加者の年齢は10代の割合が増える一方で20代～40代が減少傾向、全体としては50代以上の割合が年々増大している（資料8）。男女比は徐々に男性の参加者が少なくなっており、男性の参加者が全体に占める割合は2015年度が36%、2016年度が27%、2017年度が21%であった。



資料8 ワークショップ参加者の年齢推移

#### 4-5 参加者の声

毎回のワークショップ後に簡易な自由記述式のアンケートを実施し、参加者の意見や感想を聴取している<sup>1)</sup>。最も多い声は「ぜひまた参加したい」（18人）であり、「賛美歌の由来がわかり良かった、勉強になった」（14人）、「わかりやすい指導だった」（6人）、「普段顔を合わせる事のない方々と歌うことができ楽しかった」（5人）など、充実して楽しい時間であった声が多かった。「学生気分を味わえて良

かった、懐かしかった」(3人)、「音程や歌い方、リズム等内容が深かった」(3人)という声も複数あり、本学聖歌隊の参加者からは「礼拝時よりも祈りが深まる」(1人)、「学んだことをチャペルアワーや行事等で活かしていきたい」(2人)と本学での活動につながる声もあった。一方、音符に慣れていないため「前もって練習できたらよい」や「来年も同じ曲なら参加したい」という声や、「ワークショップの回数を増やしてほしい」や「講話をもっと深く知りたい」というものもあった。

## 5 まとめ

この約5年の取り組みは、本学聖歌隊を母体に大学と地域が連携し、国際交流とその発展を試みた2年間と、その連携を生かしつつ大学の1事業として本学聖歌隊の参加や、関係団体にとらわれずひろく一般の参加を促進して活動した3年間であったといえる。どちらも「賛美歌」を用い、その背景となっているキリスト教についての理解や関心を深め、共に歌うことによって大学と地域の方々との豊かな交わりの輪がひろがっていくこと、が活動の目的であったことが確認された。

しかし、ここ3年間のワークショップや行事賛美は年2回ずつと時間・回数が限られており、せっかく参加者数が増えているものの「交わりの輪」はひろがっているとは言いがたい。また、各回の参加者で創り出すその時間の達成感があっても、最終的に行事賛美で演奏するとなると更にレベルアップをはかりたいという気持ちも否めない。まずは参加者の交流が得られる機会(茶話会等)や、行事での賛美前後に余裕あるスケジュールの設定、実施回数の検討を行うことが必要である。また、今後継続・発展していくためには、講師間のさらなる連携・意見交換と、講師が変わっても維持・発展できるような大学としての位置づけ、協力体制づくりが重要となってくるだろう。

## 6 展望

2015年1月に実施した「寒梅コンサート」(桜ヴォーチェと関連団体による交流コンサート)は、本学が会場を提供し、桜ヴォーチェと各団体の発表や交流を実現できた好例であったといえる。これからも常に地域や関係大学との交流という側面は大切にしたい。なぜならこれら(場合によって海外の団体と)の「賛美歌」を通じた交流は、本学学生や教職員、参加者らの学びや経験を豊かに深めることにつながるからである。近年本学での練習や発表が続いているが、地域の教会や学外での演奏機会があっても良いだろう。

もう一つの方向性として、この取り組みをさらに良い形で発展させる方法はないだ

ろうか。たとえば、大学の新たな教育の取り組みとして、学生・一般両者の参加を想定した授業を行う、なども考えられる。学生や参加者のニーズに合わせ、時間的経済的負担のない気軽なワークショップと共に、多少負担があってもイタリア渡航の原点も大切に、地域・国際交流などを行う計画も考えていくのはどうだろうか。両者を融合する計画もできればさらに理想的である。

\*本稿の執筆は主に澤田が担当し、4-2、5、6、について山下、鷹野それぞれが分筆および加筆した。

- 
- 1 学生・教職員の任意参加型の礼拝。この時間、授業は行われぬ。2017年度は年間32回行われ、平均138名の学生が出席した。
  - 2 参加者を募る間に他団体がバチカンでのミサに参加することが決定し、筆者らはイタリアでの他2か所でのコンサートとサンレオでのミサ参加というプランに変更となった。
  - 3 合唱には参加せず同行する4人（合唱者の家族等）を含む。申込者26人の内訳は本学聖歌隊5人、卒業生1人、教員4人、元職員1人、教員家族2人、元職員家族1人、共愛学園前橋国際大学聖歌隊3人、群馬室内合唱団7人、元団員1人、団員家族1人。
  - 4 決定は2013年12月11日。2014年3月の本番が桜の時期であり日本を連想させること、また当時のNHK大河ドラマ「八重の桜」が本学にゆかりのある新島八重を主人公にしたものであったこと、海外でも分かり易い事などが、人気の理由であった。
  - 5 山下編集責任のニュースレター『SAKURA VOCE NEWS』第1号（2014年5月11日発行）はA3見開き4頁で、内容は「創刊の辞」、サンレオでのミサ献歌の様子と聖書を踏まえつづいたエッセイ「激しい風の中で」、桜ヴォーチェのイタリアツアーに向けた歩みとツアーの日程の報告、参加者の感想、You Tube 動画（「Coro Sakura Voce」の名称でいくつかの演奏がアップされている）の紹介などである。第2号（2015年1月24日発行）はA4両面2頁で、内容は寒梅コンサートに寄せての巻頭言、「イタリアでのミサ献歌及び親善演奏記念コンサート報告」、「Takano Megumi Birthday Concert 2014」報告、「寒梅コンサート」への歩みの報告などである。
  - 6 本学聖歌隊のうち、信仰を持つあるいはキリスト教に詳しい学生は、例年1割にも満たない。
  - 7 予算は広報費（雑費を含む）と講師料。
  - 8 鷹野は都合により各年1回のみ指揮者としての参加となった。
  - 9 とくに男声パートはパートに一人のみ参加の場合もあり、無伴奏でも可能な賛美についてオルガン伴奏を付したり、人数の充実のためにワークショップに参加をしていない本学聖歌隊員（5名以内）が賛美に加わったこともあった（2015～2016年度）。2017年度は本学聖歌隊員が歌唱していない賛美歌も含まれたため、ワークショップ参加者の有志のみでの賛美としている。
  - 10 資料7の「本学学生」「共愛学園前橋国際大学」には卒業生や学生の保護者も含まれる。その他「教職員」や「群馬室内合唱団」についても、その家族や元職員を含んでいる。
  - 11 アンケート末尾において、行事での賛美予定を尋ね、参加予定人数の把握も行なうようにしている。

澤田 まゆみ   山下 智子   鷹野 恵